

# デイルタイの世界観学と解釈学について

## Dilthey's Weltanschauungslehre und Hermeneutik

辻 春 香

Haruka TSUJI

### はじめに

晩期デイルタイは世界観学(Weltanschauungslehre)において、一見乱立しているように見える哲学的諸世界観が、実はどれも生という共通のものから生じていると指摘し、諸世界観を生み出した人間の生に迫ろうとした。彼は伝統的形而上学のように超越的なものを措定して哲学を構成することはもはや不可能と考え、「生を生自身から理解すること」(V, 4)<sup>1</sup>を自らの哲学の目標とした。

デイルタイは世界観学の課題を「相対主義に対抗して、宗教、詩、形而上学の歴史的過程の方法的な分析から人間精神の世界と生の謎に対する行動様態を描くこと」(V, 406)であるとしているが、マックリールは世界観の類型分けをする中で結局のところデイルタイは相対主義を克服できず、むしろ悪化させているという見方をしている。

またガダマーは、デイルタイが超越的なものを措定することに反対して生の現実性から哲学することに拘ったにも関わらず、世界観を類型化しうる視点を想定していることに矛盾があると指摘する。というのも、世界観の類型化という作業を完遂するには、解釈者が

自らの歴史的被拘束性を抜け出す必要があるとガダマーには思われたためである。

本稿では、マックリールやガダマーの批判からデイルタイの世界観学をいかにして擁護しうるかという観点から、その世界観学の意義を探ってみる。まず、デイルタイの世界観学とそれに対する批判を概観する。次に哲学の本質について考察する。なぜなら、哲学諸体系への信頼が失われたことに彼は危機意識を抱いていたが、なぜ危機意識を抱いたかについて、彼が哲学の本質をどう考えていたかが重要と思われるからである。そして最後に、デイルタイの解釈学を批判的に継承したガダマーの思索と対比させつつ、その類似点と相違点とを明らかにしたい。

### 第一章 デイルタイの世界観学

#### 1. 歴史意識と哲学の普遍妥当性要求との間の矛盾

デイルタイの世界観学は、歴史上に遺されてきた宗教的、文学的、そして芸術的世界観を類型化することで、世界観を生み出した人間の生に迫ろうとする。彼が「世界観(Weltanschauung)」という言葉を使い始めたのは1907年公刊の論稿「哲学の本質」であり、逝去した年(1911年)に公刊された論稿「世

<sup>1</sup> Wilhelm Dilthey, *Gesammelte Schriften*, Leipzig und Berlin, 1921ff. (この全集からの引用は巻数をローマ数字で、頁数をアラビア数字で記す)。

界観の諸類型と、形而上学的諸体系におけるそれらのタイプの形成」（以下、「世界観の諸類型」と略記）が世界観学の代表作とみなされてよい。

世界観学構想のきっかけとなったのは、歴史意識の高揚により哲学への信頼が失われた状況であった。ディルタイの歴史意識とは、歴史上に多様な世界観が存在してきたことを俯瞰しているような意識のことである。偉大な哲学者たちはそれぞれに自らの説の普遍妥当性を求めてきたが、歴史意識の発達によって自らの普遍妥当性を求める哲学が多様に存在してきたことが意識されるようになったことで、哲学の普遍妥当性要求は信用に足らぬもののように思われてしまった。

「哲学諸体系の果てしない多様性という歴史意識と、それらの体系のそれぞれの普遍妥当性の要求との間には矛盾が存在し、こうした矛盾がどの体系的論証よりもずっと強力に懐疑的精神を支えている。」（Ⅷ, 75）

こうして歴史意識の発達後、哲学体系が自らの普遍妥当性を求めて他の哲学体系と争う様子を好氣的に眺める傾向が強まっている、とディルタイは指摘している（Ⅷ, 76）。

## 2. 生と世界観学

歴史意識と普遍妥当性要求との矛盾により、哲学体系への懐疑が深まる中で、ディルタイはそれぞれの哲学体系が人間の生という共通項から生み出されたものと洞察した。すなわち、どの哲学体系もお互いに争いあうが、それらの哲学体系はいずれも人間の生が自らの置かれた環境から「生の謎（Lebensrätsel）」（Ⅷ, 80）を解消しようと格

闘した結果として生み出されたものなのである。彼によれば、従来の哲学のように超越的なものを指定して世界や生を捉えることはもはやできない以上、多様な哲学体系を生み出してきた人間の「生（Leben）」を考察すべきなのである。

「哲学は世界の中にはなく人間の中にその認識の内的連関を求めなければならない。人間によって生きられた生（Leben）——それを理解することが今日の人間の意志である。」（Ⅷ, 78）

要するに、哲学諸体系は一見乱立しているように見えるが、その多様性は人間の生と連関をなしているがゆえに、世界観学は歴史上の諸類型を類型分けすることでこの生の連関を捉える試みなのである。

## 3. 生の謎と世界観の形成

世界観とは、「世界認識、理想、規則の付与、そして最高の目的規定を含む精神的な形成物」（Ⅴ, 380）のことである。またディルタイは「世界観の究極の根底は生である」（Ⅷ, 78）という。

ディルタイのいう生とは生物学的な生命のことではなく、自己と世界を包括する連関の全体性のことを指している。生についての省察から生の経験から成立するが、生の経験から生全体を把握しようとする、世界と生の謎がそれを阻む。そうした謎の代表的なものは、生殖、誕生、成長、そして死である。

「生の謎の中では混乱しながら一束の課題として含まれているものが、ここ（世界観）において問題と解決の意識的で必然的な連関へと高められる。」

(Ⅷ, 84)

「生きているものは死については知っているが、それを理解できるわけではない」(Ⅷ, 80-81)がゆえに、人間は理解の及びえない謎に対抗するための支えを必要とし、その支えは世界観において獲得される。なかでも哲学的世界観こそ、生の謎に普遍妥当な解決を与える役割を担ってきたわけである。

#### 4. 世界観の類型分け

論稿「世界観の諸類型」では、人間の生から世界観がどのように形成されるかが考察された後、世界観の類型分けへと進んでいる。その類型化において、デイルタイは世界観を宗教的世界観、芸術的世界観、哲学的世界観の三つに分け、さらに哲学的世界観を自然主義、自由の観念論、客観的観念論に類型化している。

##### (i) 自然主義

デイルタイによれば、自然主義が前提とされている考えは、人間が自然によって規定されているということである。こうした世界観はいつの時代も一部の人間の中に存在している。人間すなわち自然という考え方であり、自然主義の仲間としては、感覚主義、機械論、そして快樂主義が挙げられている。いずれも「享樂への意思、そして強力で未知な世の成り行きに服従することで融和する」(Ⅷ, 101)という点が共通している。

##### (ii) 自由の観念論

自由の観念論は、自らが自然主義と全く異なった人生観、世界観、理想を持っているという意識を有する一方で、汎神論にも反対する。この世界観を持つ人は、個々人が自由な

もの同士として結びついており、他の人格によって規定し規定されるという自発的なあり方をしていると考える。自由の観念論に属するあらゆる世界観に共通するのは、認識論的に意識の事実に基づけられていることである。この世界観は意識の事実のなかに普遍妥当な基礎を持っているが、みずからの原理を学問的に普遍妥当的に定義したり、基礎づけたりすることはできない。

##### (iii) 客観的観念論

客観的観念論は自然主義と自由の観念論に対立する。この類型は思想家の生の状態にもとづいている。客観的観念論の場合、把握の形式はつねに同じで、その形式は全体のなかの諸部分を概観し、生の連関を世界の連関に高める。客観的観念論を特徴付けるのは、世界解釈が普遍妥当性を獲得することを目指すという点にある。

以上のようにデイルタイは哲学的世界観を類型化している。彼はこれらの世界観のうちのどれかがほかの世界観より優れているという見方はしない。マックリールはこのことが一つの理由となって、デイルタイが相対主義を克服できていないと指摘している。

#### 5. マックリールとガダマーの批判

デイルタイは人間の生を捉えるという目標を掲げて世界観を類型分けしたのであるが、これについて彼が相対主義に陥っているという批判がある。マックリールは『デイルタイ——精神科学の哲学者(Dilthey — Philosopher of the Human Studies)』(1975)において「ヴィルヘルム・デイルタイは形而上学的世界観の分析において相対主義の問題を悪化させているという印象を与えている」(Makkreel 1975,

p.348）と述べ、世界観学はデールタイ哲学の中で満足させることが最も少ないものだという評価を下している。マックリールによれば、

「もし偉大な三つの世界観型が、それぞれ独自に割り当てられた文化の体系に分けられえたなら、デールタイの世界観の類型論が引き起こした価値評価の問題はもしかすると避けられえたかもしれない」（ibid., 347）

すなわち、客観的観念論が文学、主観的観念論が宗教、そして自然主義が哲学に割り振られていたなら、客観的観念論、主観的観念論、自然主義という類型の間の違いは、それぞれの文化体系の補足的な表現として片づけることができたという。しかしデールタイが哲学という一つの文化体系の中に三つの世界観類型を見出したために、世界観相互の争いはさらに先鋭化されてしまったのである。

またガダマーは、1960年刊行の『真理と方法（Wahrheit und Methode）』（1960）で、デールタイ批判を展開している。繰り返すまでもなく、デールタイは人間の生の有限性から出発しなければならないと主張したが、ガダマーによれば、世界観を類型分けしうる視点を想定しているということは、人間の生の有限性を超越した地点に到達できることが前提となっているという。こうしたデールタイ批判が足場となって、ガダマー自身の哲学的解釈学が築かれたのであった。

デールタイは「相対主義に対抗して、宗教、詩、形而上学の歴史的過程的方法的な分析から人間精神の世界と生の謎に対する行動様態を描くことが、世界観学の課題である」（V, 406）とも言っているが、マックリールやガダマーによれば、デールタイは世界観の多様

性という事態にはまりこんでしまい、結局のところ相対主義に対抗できなかったようにもみえる。

しかし実際には、デールタイの世界観学はやはり相対主義に対抗する手段の一つでありうるし、ガダマーのいうように人間の生の有限性を等閑にしたわけでもないのではないのか。その問いに答えるために、デールタイが解した哲学の本質がどのようなものであったかが懸案となる。そもそも、なぜデールタイの目には哲学に対する懐疑の深まりが問題と映ったのか。

## 第二章 哲学の本質と世界観学

### 1. デールタイの考える哲学の本質

デールタイは論稿「哲学の本質」において、哲学の本質をまず哲学の歴史的事態から探り、さらに別の概念との関係を考察することで哲学の本質をより正確に規定しようと試みている。それによって得られた結論は、第一に、先述のように哲学が生の謎の普遍妥当的な解決を目指しているということである。第二に、哲学は人間の構造の中に備わっていること、第三に、哲学は社会という目的連関の一機能だということであった。

ここでは前章で触れた第一以外の、第二、第三についてさらに詳しく見ていきたい。デールタイによれば、あらゆる精神的所産は人間の心的生から生み出されるが、その心的生には本来的に哲学への傾向が潜んでいる。彼は心的生に含まれる出来事が体験可能なものとして結びついている連関のことを「心的構造（die seelische Struktur）」と呼び、心的構造を規定する要素として次のことを挙げる。

1. どの心的生も自らの置かれた環境に

よって制約を受けていること。

2. どの心的生も環境に合目的的に働きかけること。

哲学も含めた精神的所産を生み出す心的生は、環境に制約されているとともに、環境に合目的的に働きかけもする。そもそもわたしたちの価値評価は、いわば裸の状態から起こるのではなく、外的環境と自らの心的生との関係に影響を受けて成立している。

「こうした価値評価に導かれ、わたしたちは合目的的な意志行為によって環境の状態を変えたり、自らの生において起こる出来事を意志の内的活動によってわたしたちの欲求に適應させたりする。」(V, 373)

さらにデイルタイは次のように話を進める。

「人間の生の連関には知覚、記憶、思考のプロセス、衝動、感情、欲望、意志行為が最も多様な仕方で相互にからみ合っている。どの体験 (Erlebnis) も、わたしたちの存在の一つの契機として満たされ、構成されている。」(V, 373)

デイルタイが心的構造の核心にすえるのが衝動と感情であり、心的構造は目的論的性格を持っていて、衝動と感情によってもたらされる願望をどうにか満たそうとする。人間が世界観を形成するのは、生の内的構造によるが、外的な環境からの影響も無視することはできない。さらにそうした連関を形成する諸々の要素、経験は、人間によって様々に異なる。たとえ同一の環境に置かれているとしても、体験は各人によって様々であるし、そこで生じる精神的所産もまた多種多様なもの

となる。

## 2. 哲学の本質と世界観学の意義

歴史意識の発達によって哲学諸体系への信頼が失われたが、普遍妥当的な知への傾向や、それによって自らの行いを確固たるものとしていたいという哲学的欲求は心的構造に本来的に備わっている。デイルタイの世界観学は、世界の生の謎の答えを世界の中にはなく、人間の生きてきた生に求めるという方向を指し示すことによって、心的構造に本来的に備わっている哲学的な傾向を満たすという新たな可能性の提示だったのではないか。

「あらゆる世界観の相対性ということが、すべての世界観を経巡ってきた精神の最後の言葉ではなく、精神の最後の言葉とは、世界観の個々のものすべてに対する精神の卓越性、また同時に、精神のさまざまな行動様態の中で私たちにあって世界のリアリティが現存することを肯定する意識である。」(V, 406)

自然主義、客観的観念論、自由の観念論といった類型化された後の成果物から、歴史意識がもたらした矛盾への答えを探そうとするならば、マックリールという通り、世界観の相対性という状況に答えを出せていないように思われるかもしれない。しかし、世界観の類型分けに実際に携わる者の視点から眺めると世界観学はまた違ったものに映る。歴史と向き合い世界観を類型化するという行為自体が、類型化を行う各個人にとって普遍妥当的な知を求める欲求を満たすものでありうる。すなわち、世界観の類型化とは、様々な世界観の相対性という状況に直面して「いかに生きるべきか」という問いを抱く人が、その答



えを人間の生きてきた歴史の中に見つけようとする一つの態度のあり方だ、とも捉えられるのだろう。

それゆえ世界観の類型化の仕方は人によって異なってくることもある。デイルタイ自身、自然主義、自由の観念論、客観的観念論といった世界観の類型分けは暫定的なものであると断言している。

「どんな研究も暫定的なものでしかない。それは歴史をより深く洞察するための補助手段にすぎないのであり、いつまでも補助手段であり続ける。」（Ⅷ、86）

デイルタイの思想を相対主義と批判することは可能だが、その言葉で片付けてしまうと失うものは大きい。ガダマーもデイルタイに対する相対主義という批判については、事柄の本質を捉えられていないとして「この論証を使うものは正しいことを言っているが、実り豊かな優れた洞察を述べてはいない」（Gadamer 1986, S.350）と指摘している。

### 第三章 世界観と解釈学

#### 1. デイルタイと解釈学

ボルノーは『生の哲学』において、デイルタイの思想を評して説明を加えている。

「生の現実を解釈するこのやり方は、精神諸科学から取り出され、デイルタイによってその普遍的な意味が認められた概念によって、解釈学と呼ばれている。」（Bollnow 1958, S.126）

デイルタイは生の現実を解釈するための方

法として解釈学に取り組んでいた。彼は若い頃から「一般解釈学の父」と呼ばれるシュライアーマッハーの研究をしていたから、哲学博士論文の表題は「シュライアーマッハーの倫理学の原理について」であったし、『シュライアーマッハーの生涯 第一巻』は彼の処女作であった。

シュライアーマッハー以前の解釈学は、聖書解釈学、古典文献学、法学という個別の分野でそれぞれに発展していたが、シュライアーマッハーが分野の垣根を超えてテキスト一般に通用する「一般解釈学」を構想したのである。デイルタイはそのシュライアーマッハーの解釈学を精神科学の認識論的基礎づけの方法論として取り入れている。そして後にガダマーは『真理と方法』においてシュライアーマッハーとデイルタイの解釈学を「ロマン主義的解釈学」と呼んで批判し、解釈学は別の道を歩むべきだと主張した。

#### 2. 「体験・表現・理解」と「適用」

ここではデイルタイが解釈についてどのように考えていたかを明確にするために、デイルタイとガダマーの解釈学の違いを概観したい。

デイルタイは解釈学を「表現（Ausdruck）」を通して他者の「体験（Erleben, Erlebnis）」を「理解（Verstehen）」することとみなす。解釈とは「文字によって固定された生の表示の技巧的理解」（Ⅴ、322）であり、理解とは「感覚的に与えられた生の表示から、その心的なものを認識する過程」（Ⅴ、322）のことを指している。デイルタイにとって解釈学とは、文字で残された表現を介して、その表現を生み出した他者（著者）の体験に遡るための技法なのである。

ここで、デイルタイの批判的継承者ガダ

マーに目を向ければ、その解釈学の特徴は「適用 (Anwendung)」である。彼にとって解釈とはテキストの内容を解釈者自らの状況に関係づけること、つまり適用することであった。ガダマーは表現を介して他者の体験を理解するというディルタイ解釈学の目標設定に反対し、テキストの意味は文字で表されることで著者から切り離されるとした。著者がどんな状況でその表現を生み出したかを知ることが、解釈の第一の目標とすべきではない。それを目標とすることは解釈者が自らの歴史的被拘束性を克服し、超越的な地点に到達しうることを前提としなければ不可能だと考えたからである。

ディルタイは解釈の目標を「著者を著者自身よりよく理解すること」であるとしたが、ガダマーはこの目標設定に対して「理解するときには、著者と別様に理解する」(Gadamer 1986, S302)としている。ガダマーにとって解釈とは、解釈者がテキストと対話することで新たな意味が生まれることなのであり、解釈者の使命は過去と現在における地平の融合をうまく作動させることなのであった。

### 3. ディルタイとガダマーの類似点と相違点

ガダマーはディルタイが他者の体験の理解を解釈の目標としている点を批判したが、実際にはそれだけが目指されていたわけではなかった。ディルタイによれば解釈者が他者の表現に自己の体験を自己移入することで、自身の生活の中では体験できないものが追体験され、それが解釈者の現在の体験になるという。他者の体験の理解を目標とするのではあるが、その結果得られる体験は他者の体験と全く同じものではないのである。

その点から見ると、ディルタイの解釈学においてもガダマーと同じように「新たな、そ

して別様な解釈」が生まれているといえるだろう。しかし、著者理解を目指してテキストを読む場合 (ディルタイ) と、自らの状況に適用させることを意識してテキストを読む場合 (ガダマー) とでは、得られるものが異なってくる。他者の表現を手がかりとして、その背後にある体験に遡ろうとするプロセスも、世界観の類型化と同じく、「いかに生きるべきか」という問いに答えるための一つの手段である。

### 結論

ディルタイは歴史意識の発達による哲学への信頼失墜に危機感を抱き、その状況に対処するために世界観学を構想した。歴史上に遺されてきた諸世界観を類型化することで、それらの世界観を生み出した人間の生がいかなるものかを捉えようとしたのであった。

マックリールはディルタイの世界観学について相対主義を悪化させているとして指摘した。実際、類型化され終わった成果 (自然主義、客観的観念論、自由の観念論という分け方) だけを見ると、相対主義に対してなんの解決も得られないように思われる。しかし、哲学的傾向がどんな人間にも備わっているとディルタイは考えており、その傾向は哲学への信頼が失われた後も残り続ける。世界観を類型化するというその態度そのものを、そうした傾向を満たすものと、相対主義に対抗する一つの手段として役立つのではないか。

またガダマーは、ディルタイが生の実践性から出発することに拘ったものの、その出発点からは到達できるはずのない目標を設定していることを批判していた。もし学として客観的な類型化を完成させたいならば、類型化を行うものは自らの歴史的な立脚点から抜け出せなければならぬ。しかし、世界観の

類型化がいつまでも暫定的なものであることを認めるならば、そうした目標設定それ自体は批判されるべきではない。

解釈学に関しても、デイルタイは他者の体験の理解という、有限な人間には到達不可能な目標設定をして、ガダマーから批判を受けている。しかし、デイルタイは他者の体験の理解を目標にテキストを読むことを通して、自らの生活の中では得られない新たな体験ができると考えていたのであった。そうであるとするれば、他者の体験の理解という目標設定それ自体は（その目標が実際に到達可能であるかは別にして）ただちに却下されるべきものではないだろう。こうして得られる体験は、テキストの意味を自らの状況に適用することを意識している場合とは異なるものである。

## 引用・参考文献

Hans-Georg Gadamer, *Gesammelte Werke Band.1: Wahrheit und Methode — Grundzüge einer philosophischen Hermeneutik*, 1960, 5. Aufl., 1986.

O. F. Bollnow, *Die Lebensphilosophie*, Sptinger-Verlag, 1958.

Rudolf A. Makkreel, *Dilthey — Philosopher of the Human Studies*, Princeton University Press, 1992.

Wilhelm Dilthey, *Gesammelte Schriften. Bd.V*, Stuttgart u. Göttingen, 1990.

Wilhelm Dilthey, *Gesammelte Schriften. Bd.VII*, Stuttgart u. Göttingen, 1991.

ヴィルヘルム・デイルタイ／長井和雄、竹田純郎、西谷敬・編集／校閲（2010）『デイルタイ全集 第4巻 世界観と歴史理論』、法政大学出版局。

O. F. ボルノー／戸田春夫訳（1975）『生の哲学』、玉川大学出版部

ハンス＝ゲオルク・ガダマー／響田収・巻田悦郎訳（2008）『真理と方法Ⅱ』法政大学出版局。

ルードルフ・A・マックリール／大野篤一郎、田中誠、小松洋一、伊藤道生訳（1993）『デイルタイ——精神科学の哲学者』、法政大学出版局。